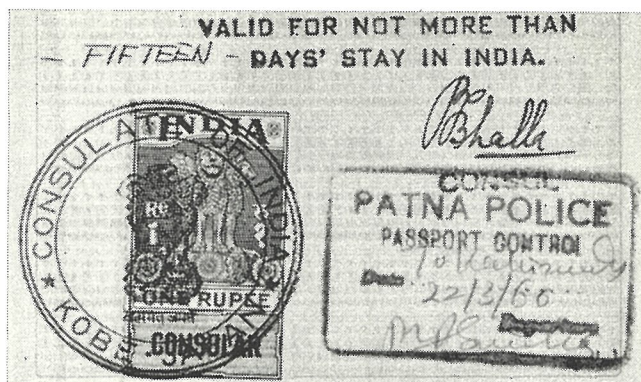


一九六三年第二次

ヒマラヤ遠征計画



同志社山岳会では、今夏、山岳会の四十周年記念を兼ねて、第二次ヒマラヤ遠征を行なうことになった。一九六〇年、同会による西北ネパール・ヒマラヤの最高峰アビ (A.P.) 七一二米の初登頂成功は、日本はもとより、広く世界各国に知られている。これは戦後、日本人によってなされたヒマラヤ初登頂のマナルス、チゴリザに次ぐ第三番目の登頂であり、同じネパール・ヒマラヤの内でも秘境の地といわれていただけに、高く評価されている。

サイバル登頂計画

今回の遠征は、アビに続くこの地方の第二峰として古くから知られているサイバル (Saibal) 七〇四〇米の登頂を試みると共に、この山群からはるか東方に位置するダウラギリ・ヒマール (Dhaulagiri Himal) までの全長二八〇マイルにわたる、西北ネパールから中部ネパールにいたる横断調査を行うものである。

計画の概要

- 目標(1) 西北ネパール・ヒマラヤ、サイバル峰 (七〇四〇米) の登頂
(2) 西北ネパール、カリ河 (インド・ネパ

ールの国境) から、中部ネパール (ダウラギリ・ヒマール付近) にいたる全長二八〇マイルの横断調査

実施期間 一九六三年八月〜十二月

メンバーの構成

(1) 隊員 六名 (内三名は横断調査隊員)

隊長 児島勘次 一九一〇年生

一九三四年、同大文学部英文学

科卒

日本山岳会々員

副隊長 平林克敏 一九三四年生

一九五八年、同大商学部卒

一九六〇年 アビ遠征隊副隊長

日本山岳会々員

日本ダンロップ護謄 K K 勤務

隊員 福田勝一 一九三六年生

一九六〇年 同大経済学部卒

日本山岳会々員 (山岳部監督)

日本レイヨン K K 勤務

松村多四郎 一九三七年生

一九六一年 同大経済学部卒

日本山岳会々員

三共生興 K K 勤務

佐藤和男 一九三八年生

一九六二年 同大工学部機械工

学科卒

日本山岳会々員

日本ダンロップ護謨KK勤務

岡田啓二郎 一九三九年生

同大経済学部四回生

日本山岳会々員

(2) シェルパ 六名

(3) リェゾン・オフィサー 一名

(4) ポーター 八〇名(往路)

四〇名(復路)
一〇名(横断隊)

日程

七月一日 神戸発

七月廿七日 Culcutta 着

八月一日 Tanakpur 着

八月三日 Pithoragarh 着

八月八日 Baiadi 着

九月一日 Base Camp 建設

九月二日 Saipal Route 調査期間

九月十五日 Saipal Route 調査期間

九月十六日 Saipal 登山期間

十月廿五日 Saipal 登山期間

Saipal 登頂後、隊を三隊に分け横断調査

を行なう。

第一隊

十月二十八日 B・C 出発

十二月二十三日 帰国

第二隊

十月二十八日 B・C 出発

十二月三十日 帰国

経費

遠征に要する経費の内訳は次のとおり

(1) 外貨

円払旅費(航空船舶) 一・五八〇弗

交通費(現地交通費) 六六七弗

滞在費 一・二三二弗

現地食購入費 四五〇弗

人夫費 二・三一四弗

通信費 一六〇弗

登山料 三三四弗

関税引当金 四〇〇弗

その他 一〇三弗

計 七・二四〇弗

内訳 円払外貨 一・五八〇弗

外貨 五・六六〇弗

(2) 円貨

装備費 八八〇千円

食糧費 三五〇千円

医療費 六〇千円

梱包費 五〇千円

通信・交通費 一〇〇千円

その他 二一〇千円

計 一・六五〇千円

その他

(1) 装備 特殊装備(高所用天幕並に登攀用具)を除き、ひざる限り Air 遠征の際の装備を使用する。

装備の総重量は約九〇〇kg

(2) 食糧 四十日間の登山食(高所用食糧)を除き、できる限り現地食を使用し、副食を若干持参する。

日本より持参する食糧総重量約七〇〇kg

従って遠征に必要な装備・食糧・調査器具を含め、総重量は二一トンとなる。

同志社大学

ヒマラヤ遠征委員会